

⑦【単年度】国道190号(常盤通り)のウォークブル化に向けた社会実験(山口県宇部市)

1. 実験概要、留意すべき項目

- 副道の活用形態の変更により、歩行者利便増進道路制度を検証する。
- 副道の活用形態の変更による歩行者利便増進道路制度の検証は少ないため、参考事例となる可能性が高く、推奨すべき取組みとなること。

2. 実験内容、実験結果

- 副道の活用形態の変更による滞在空間の創出
⇒実験中のイベント時には歩行者通行量が増加したが、一時的なものであり、継続性に課題
- 副道の活用形態の変更による横断歩道の延長の短縮
⇒高齢者の満足度が高く、高齢者にとって横断歩道の延長の短縮の重要度が高いことが確認
- 副道の活用形態の変更による副道から本線への流入の安全性の確認
⇒副道の逆走や副道から本線への流入部における車両のはみ出しを確認
- 周辺駐車場との連携
⇒新たな駐車場の整備だけでなく、既存の民間駐車場の活用という手法の妥当性を確認



くつろぎスペース



横断歩道延長の短縮

3. 意見と検討、対応方針

実験メニュー	実験内容
中心市街地へのアクセス方法を検討すること。車でくるのがメインであれば駐車場、公共交通を用いるのであればバスなどの管理者に意見徴収すると良い。	基本的には車でのアクセスがメインと考えているが、公共交通や学生など自転車(駐輪場)でのアクセスもあるため、そこについても考えていく。
自転車導線をしっかり検討すること。第1走行車線はバス優先レーンであるため、バスが緩速走行し、自転車と共存も可能だと考えており、矢羽根型路面標示も可能と思われる。	矢羽根型路面標示により、自転車を車道に促す方法を検討している。
ハード整備後の運営も大切。継続して資金計画や体制づくりをすること。	協議会や部会で管理運営について検討していく。
持続可能な維持管理の体制をしっかり検討すること。民間も巻き込むことが必要である。	収益を維持管理費に還元できるような維持管理体制を検討する。
水道と電源を取る場所を確保しておくこと。維持管理にも繋がってくる。	実施設計で散水栓や電源コンセントの設置を検討する。

⑦【単年度】国道190号(常盤通り)のウォーカブル化に向けた社会実験(山口県宇部市)

4. 本格実施に向けた課題、今後の取り組み予定

課題	対応方針
実験前と比べ実験中の平日と週末は、滞在人数は増加したものの歩行者通行量は増加しなかった。	様々な利活用ができる場所として情報発信を引き続き実施し、市民等に幅広く周知するとともに、沿道事業者の参画を目指す。また、毎週末に魅力的なコンテンツを実施することで利用促進を図る。
横断歩道の延長の短縮の必要性が確認できた。	実施に向けて、引き続き道路管理者及び警察と協議を行う。
実験中は、副道の逆走等のヒヤリハットが発生した。	市民等に副道の活用形態が変わることを幅広く周知するとともに、警察等と将来の整備時における規制標識等について協議を行っていく。
実験前と比べ実験中のイベント時や週末は駐車場稼働率が増加したものの平均稼働率は4割以下であった。	より効果的な駐車場の周知方法を検討し、早い段階から事前周知を行う。また、今後社会実験を重ねることで、常盤通り周辺に必要な駐車場の総量を把握していく。アプリ等を利用した常盤通り周辺の駐車場のリアルタイム情報発信の手法も検討していく。

5. 今後のスケジュール

- R5年度 社会実験(新モビリティの運行、DXを活用した情報発信、自転車歩行者の安全性確保)
実施設計・工事(滞在空間の整備、修景整備)
- R6～R8年度 社会実験(ソフト面の充実に向けた実験)、工事(滞在空間の整備、修景整備)

6. 制度改正、マニュアル作成、全国展開に向けた提案

- 空間整備だけでは恒常的な集客は難しいと考えられるため、魅力的なコンテンツを定期的にも実施することや、様々な利活用ができる場所として市民等に幅広く周知することが必要である。
- 横断歩道延長の短縮については、利用者の満足度が高かった。特に車線数が多い道路においては、子どもから高齢者・障がい者まで多世代の方々の安全性が向上し、外へ出かける機会を増やし、まちの活性化に寄与すると考えられる。
- 移動距離が長い地域において、来訪者を増やすためには、近郊エリアからの移動をサポートするデジタル技術を活用した自動運転など、低料金で気軽に利用できる移動手段や公共交通の利用促進についても検討が必要と考えられる。